

## 卷頭言



# 切手を破いた大臣

桜の聖母短期大学学長

今 泉 ヒナ子



間接に聞いた話で恐縮だが、東京のある大学の学長が、最近、某国の労働大臣を訪れた。大臣室で執務中らしい大臣を見ると、まだ使つてない郵便切手をびりびりと破いているところであつた。不審に思った学長が、なぜそんな無駄なことをするのかと尋ねたところ、大臣は、「私は、公用に使うべき車で、ついでに私用の回り道をしたのです。国のお金を個人の用途に使つてしまつたことになるので、自分のお金から国に返済するために、相当する金額の郵便切手を買って、こうして破いて棄てているのです。」と答えたといふ。

この話を聞いて、私は「さすが！」と、うなつてしまつた。

この大臣の爪のアカでも、どこかの國の大臣がたにせんじて飲ませたいなどと、おこがましく口を開く気はない。それよりも、こういう潔癖さの基底となる世界觀を、政治家たちが持つてゐるというその國の文化を、つくづくうらやましく思わずにはいられない。

人が見ていなければ、エライ人でも平氣で悪いことをする國、日本。人に迷惑さえかけなければ、自分の利益をどこまでも追求することに疑問を持たない國、日本。われらの祖国を、こういふ國にしてしまつたものは何か。

答えは、各自の専門領域やイデオロギーによつてさまざまになるかも知れない。しかし、誰もが共通して認めることは、とにかく、明治以来のわが國の

教育が、結局自分の損得につながるもので価値を決める考え方導いてしまつたという事実であろう。

われわれを見ておいでになる至高の方の前で、襟を正すことを知る生き方を、教育によつて広め、日本を徐々に変えていくこともまた、できるのでは無いだろうか。

右の労働大臣の切手の話を、數名の友人（いずれも日本人）とともに聞いたのであるが、その時、一人が言った。「でも、びりびり破いたなんて、もつたないですね。困っている人にあげて使つてもらつた方がいいでしよう」。

そう言つたとんに、実は本人もアツと首をすくめ、同席のわれわれも等しく気づいて笑い出してしまつたのであるが、ここにもまた、日本人の現実主義があつた。すべてを利用し尽くし勤勉で無駄のない生活をしてきたおかげで、われわれは高度成長を遂げた。しかし、この世の物差しではかつた場合の「むだ」が、実は人生に必要なものである。

それは、使える切手を数百円分びり破ることかもしれないし、誰にも知られない奉仕をすることかもしれない。昔の人たちは、その聖なる「むだ」の必要を知つていたからこそ、一番よいものを「お供物」として奉納してきたのではなかつたか……。